『島を愛した男』考

鉄　村　春　生

〔I〕

弾力性のある性格創造や人物の内的発展，形式（フォーム）や論理の展開が欠けているというD．H．ロレンスの作品評が一般的に一方にあって，そしてそれは正鵠をついているのであり，『島を愛した男』（1927）はそういった批判をまぬかれるまれな短篇小説である。この短篇でのロレンスは，熱狂的な福音伝道者まがいのヒステリー症状をみせることもなく，内部に湧きかえる感情の氾らんに戸惑って声高にわめく神秘家にもならず，燃えたつ生命力の焔を圧殺するものへの批判精神と自然にたいする宗教家のデリケートな感受性とを整ったフォームのなかに収めて，落ち着いた芸術家となっている。

この作品がフォームを強固にしている基本的なものに，幾何学的単純さの美があげられよう。物語が分けられている三部の一つ一つに，島を愛した男の覚醒のない夢とその挫折ぶりが順次にふり当てられ，しかも，規模が段階を追って縮小される三つの島はその理想の崩壊現象を徐々に微視的にみる現場となっている。あるいは逆に，そのような三つの島が物語の骨子を受けついで，主人公の夢と崩壊をそのようにくり広げてみせているということもできるのであって，このいわば可逆性が作品の様式化された説話形式の保証とも均衡の美ともなっている。

空間の減少に比例して精神模様を簡素にし，鋭角化していく主人公に固有の名前が与えられたからといって，それがなにか特別な効果を狙っていることもなく，主人公は無名にひとしいままでこの物語は成立している。主人公は使用人から一度かぎり「キャスカートさん」（Mr Cathcart）と呼ばれてその固有名詞を確かめることができるだけで，身体上の特徴や社会での位置についてのモンタージュ写真の作製をまったく不可能にしたまま，物語は進展して，それで自然になっている。使用人たちもことさらに他から区別されるための独自の名前をもつ必要もないようになっていることはもちろんのことである。こういった使用人に囲まれた主人公の人間としての空間が狭められていることが，作品を説話とか寓話とかで呼んでもよいようにしているのはたしかであって，このことは 'There was a man who loved islands.' という冒頭の一文が十分な証となっている。「島を愛した」には，同時に，物語を動かせ進展させるものの十分な示唆がある。擬似に終わってはいるが，ある男が「島を愛した」その情熱が燃料となって物語を始動させているのであって，その情熱に憑かれた男の破滅の物語なのである。ただし，その情熱そのものはあらかじめ男の内部に自然に発生しているのであるが，その表現の方法や仕組みとなると，それは男の性格とは関係のないところにあって，ロレンスの思想の枠で固定されるようになっている。したがって，その情熱には複雑な屈折はなく，そういった面からも，説話の単純さを指摘することができる。

そして，'In early spring, the little ways and glades were a snow of blackthorn, a vivid white among the Celtic stillness of close green and grey rock, blackbirds calling out in the whiteness their first long, triumphant calls.' と描写される第一の島で，男の

生活は憑かれた度合いを尖鋭にしていって，その先端である第三の島で，「岩」を全部おおい隠す「白」一色の雪をその終焉の場としている。このプロセスのなかには，上記の引用文からも推測できるように，シンボリズムとリアリズムとの巧みな混淆の描写や写実が満たされていて，そんなことがこの作品を佳作としている。

〔II〕

第一の島

島に生まれ，島を愛する男が自分の島を手にいれた。ハリエニシダやリンボクが茂り，サクラソウが咲き，キバナノクリンザクラが風にゆれ，小鳥がさえずり，牛がのどかに反すうする島であった。春には，緑濃い草地やケルトの静寂のあいだでリンボクが白い花をのぞかせ，クロドリが長く啼いた。やがてヒアシンスの花が終わると夏がきて，キバナノクリンザクラが姿を消すと野生のバラがかすかに芳香を放った。まさに楽園の自然そのものであった。雨が降って秋が去り，重苦しい冬の空となった。すると島の夜は，「過去のすべての夜からやってきた魂が生きつづける無限の暗闇の世界」となった。過去の魂とは，夜，目にみえない自分の肉体を投げる大きな口ひげをはやしたゴール人たちであり，黄金のナイフとヤドリ木を手にしたドルーイド僧たちであり，海上で殺りくをほしいままにした海賊たちであった。また，日中はシデの木々に隠れている廃虚が，夜ともなると，十字架像をかかげた血まみれの聖職者たちの呻きともなった。島を愛する男の意識は，今は姿こそ消しているがかって島に住んでいたこれらの民族の過去の無限時間を現在にする，夜の異様な怨念の跋こに悩まされた。

島全体が夜の暗闇に吸収されて消え，神秘な暗黒の時間に包まれるという経験が，過去の住人の霊と接触するという感覚につながるのは，うたがいもなく，「地霊」を感受するロレンスその人のものである。現代科学では説明のおよばないこの超合理的な存在について，ロレンスは『古典アメリカ文学研究』の第一章「地霊」で，「人はもっとも深い自己の好むことをしているときにのみ自由である。」と書いている。「もっとも深い自己」とは，自意識とか社会的な意識とかいったときの二重構造の一方の仮面と相対立するものであり，また，現実と結びつくときに便利であったり，離れたときに放恣であったりするエゴイズムの対極に考えられるおのれである。それは創造的に機能するものであり，かつ避けがたく人に内在する。その顕在化が妨げられるとき，人に破壊力となって作用し，その結果，人は「自由」と「地霊」の感受能力とを失う。

また，ロレンスは聖書の黙示録について，「多くの時代にわたって蓄積された経験が，今なおシンボルのなかに脈打っている。そしてわれわれはそれに応えて脈打っている。･･･多くの人間の世代のあいだに，いくつかのイメージは霊魂のなかに埋まってシンボルとなり，人間の意識のなかにいく世紀ものあいだ伝えられて，人が触れるといつでも跳ねるように生き返ってくる。」（『ロレンス文学批評選集』）とも書いている。普通，われわれが社会生活の便利な営みに必要なのだと正当化している表層のエゴとは区別される深部に，「蓄積された経験」がある。行動は人によって千差万別であり，エゴはみな個別にみえても，その根底の無意識の領界には，古代から受けついでいるものが生の触発を待っている，というのである。ロレンスのいう「シンボル」とは，人間の「アーキタイプ」と呼んでもよいのであって，われわれの深いところで触発を待って生きている古い人間の経験の内容を指しているが，『島を愛した男』の「シンボル」とは，紀元前七世紀ごろにローマ帝国

からブリテン島に来寇したゴール人，ヤドリ木崇拝のドルーイド僧，それにとって代ったキリスト教の聖職者，七〜十一世紀の海上で猛威をふるった北欧ヴァイキングらの経験である。

彼らの経験をおのれの深部で感受し，真の「自由」となる機会が島を愛する男に提示された。

島の四季に色とりどりに咲き乱れる草花やのどかに反すうする動物の群れはあくまでもその外側の現象であって，それを「血の交歓」(blood-intimacy) の対象としておのれのなかに取りこむことはしなかったし，また，作者からそういった方向への傾きをもった描写を与えられることもない島を愛する男のことである。男は無限時間の恐怖と暗闇の呼び声を「たわごと」(nonsense) として信じようとはせず，深部の世界，夜に背をむけて，明るい昼間の世界に生きようとする。この「自由」の可能性を放てきしての「白い意識」志向は，ちょうど，『カンガルー』のソマーズがオーストラリアでみた高度に文明化された都市に期待を裏切られて，コーンウォールで経験したキリスト教以前から存在する地霊の感覚を回顧して，異教の人間に変わるプロセスの逆向きとなっている。ちなみに，ソマーズは作者の分身である。男は暗闇と無限時間から逃れるために，おのれを無限時間から剝ぎ起こして，おのれを一点 (a single point) に縮め，自分の島 (his material island) を「楽園」にすることに明るい意識を集中する。そもそも，「自由」とはおのれの拡大であって，おのれを「点」に固定することではないし，また，唯物主義に造られた「楽園」がおのれの自然な息吹きの鼓舞を約束する土地とはなりえないはずである。

この逃避の動きは男の主義になり，男の内部の貧弱化と破滅のすべての出発点となる。過去の「シンボル」を感覚したときが，じつに，おのれは存在するのだという感覚上の手応えをつかむ機会であったにもかかわらず，男はそれをみずからの手でつぶしてしまう。男は「彼なりに詩人であった」のであり，本質は散文的であり，しかもその散文には限界があった。この逸機から，男の終末がはじまり，自己崩壊が重ねられていく。

島を愛する男の理想郷計画は一見，現代文明社会の否定を礎石にしているようでありながら，楽園恢復の現実の方法は否定するはずの文明社会の生活機構の一部をそっくり移植することではじめられた。この方法は，ギリシア・ラテンの作家が書いている花を系統だって分類し，それによって自分の芸術的欲求を満足させようとする男の擬似芸術のやり口にもエコーしている。ともかく，男の努力で自己生産的な共同社会建設の諸条件が整えられ，島民の善意でユウトピア建設は円滑に実現されていった。そして男は，その「祝福の島」を「自分のパーソナリティ」(his own personality) で満たそうとし，そこの「ご主人さま」となった。それどころか，「博愛」(benevolence) を奉公人である島民たちに与えて，「救世主」(Our Saviour Himself) とさえ呼ばれた。こうして男が島民に愛され，慕われ，感謝され，そして島民に優しさと幸福感を喚起しようとする善意と情熱はみごとに報いられたかのようであった。

島を愛する男が島民と感情の交換をはかった「善意」は，「血の交歓」からみれば，人為的な人間関係の一要因でしかないことがわかる。作者の註釈が水をさしているからでもある。

It is doubtful whether any of them really liked him, man to man, or even woman to man. But then it is doubtful if he really liked any of them, as man to man, or man to woman. He wanted them to be happy, and the little world to be perfect. But

anyone who wants the world to be perfect must be careful not to have real likes or dislikes. A general goodwill is all you can afford.

The sad fact is, alas, that general goodwill is always felt as something of an insult, by the mere object of it; and so it breeds a quite special brand of malice. Surely general goodwill is a form of egoism, that it should have such a result!

島民を愛する男の「博愛」と「善意」との虚偽のからくりを，作者はあっさりと皮肉と悪意の調子であばいてみせる。説話者の音調が軽口の響きに染まると同時に，全知である語り手の客観は大仰な感傷に変わったりする。このことは，作者がここでキリスト教の倫理批判を急にあからさまにしかけた態度とおそらく関係があるのであろう。作者の考え方ははっきりしているにもかかわらず，この揶揄調の暴露の書き方は，男はここで，正常な自己実現を禁止され，悲劇的なコースをすすむことを宣告されたのだと解釈し，そしてその解釈でとどまるようになっている。語り手の立場は感情によって汚されるべきではなかったのであるが，それとは無関係に，この情況と意味とは，ロレンスがキリスト教の説く愛の倫理と対決した『アポカリプス論』の最後の章にある，「現代人は愛しえない」という悲痛な断言のなかにも甦っている。

島を愛する男が，島民の微笑や敬意，追従に近い優しさに擬装された嘲笑，悪意，非情などの現実はもちろんのこと，自分の「博愛」と「善意」のエゴイズムの実体にも無知であったことはいうまでもない。この擬装のメカニズムは，やがて島内の人間関係の葛藤と亀裂となってあらわれ，島を離れる者をだしはじめた。島民の密かな搾取と資本の赤字とが彼らの嘲笑と悪意とを証明した。島を愛する男の内在する虚偽が原因となっての自然な報復であったし，理想郷を追う男の「パーソナリティ」崩壊の一側面でもあった。楽園という黄金時代再現の手段を物質主義に求めたこと自体，男の「パーソナリティ」の貧弱さを物語るのであり，その内的崩壊の尺度ともなるのであって，そこに作者の倫理がある。

他方，この島民の不協和音とパラレルになって，超科学的な存在にたいして男が合理的な理想主義者として処した抵抗の論理にも，綻びの結論がではじめる。一頭の牛が崖から転落死するという原因不明の事件がそれである。男が内なる非合理を否定した報いの象徴とも，過去の暴力と犠牲の怨念が否定されたことの復讐ともいえようか。

文明が非文明的なものに破られはじめた。男は「ご主人さま」と呼ばれはしたものの，島という自然の「ご主人さま」ではありえなかった。自覚されない欺瞞の意志と美徳で自然を征服しようとする大胆かつ不尊きわまりない試みや，人工的操作による幸福をもって自然の秩序と張り合おうとする楽観的な企てには，現代人が現代人であろうとするゆえんがちらついている。これと対峙して，おのれを自然の一部と認め，自然の秩序に忠実に生きていた——とロレンスは信じた——古代人の理想郷におけるヴィジョンが想定されている。

あい変わらず花が咲き乱れる島の美しい外観とは別に，島は「裏切り深く，残酷で，悪意に満ちて」いた。島を愛する男はその島を手放した。男は楽園の主神になることができなかったばかりか，そのイメージはアダムの楽園追放の現代的別形としてとらえることができる。そして，「祝福の島」建設でとられた物質主義的方法が強調された形で結晶して，島は「便利な新婚とゴルフの島」となる。

第二の島

島を愛する男は第二の島を求めて移住した。島の規模は縮小され，使用人の数も五人に限定され，物質的慰安を追求することもない生活となった。いきおい私的な雰囲気が濃くなり，そこは「一種の避難所」となった。花に関する男の著述を使用人の娘がタイプする音だけが島の生活の静寂を破る文明の響きであった。過去の怨霊に悩まされることもなく，簡略化された孤独の生活は男の理想にほとんど完全に応えて，男の当初の情熱を吸収したばかりでなく，合理主義的な考え方や「善意」，「博愛」をも決定的に消化した。この抑制状態への変化は男の地位にもあらわれて，「ご主人さま」は「キャスカートさん」に矮小化した。男の意図や情熱は「あらゆる欲望から解き放たれた奇妙な静けさ」に変質した。そしてこの「静けさ」を，男は「幸福なのか」と自問してみるし，また，「ぼくは夢になっているのだ」とも，これが幸福なのだとも思うのであった。この幸福の性質は，あらゆる活動や感覚を欠いた「夢」の無意味さや非現実で構成されていて，その特性のために，男は自分の感情にすらも反応感覚がもてず，自分がなにを感じているかにも曖昧となる。したがって，男の著作活動も，'He slowly, softly spun it like gossamer,...' と記述されているように，目的意識のない，「夢」のなかの活動のようになっている。「夢になった」男には，すべてのものが現実から遊離した虚構であって，そのために，「あらゆる欲望から解き放たれた奇妙な静けさ」は永久的なものに思えた。

しかしながら，この状態はあくまでも第一の島における情熱の反動でしかなく，精神と情緒の弾みを欠いた無感覚，非生産なのである。それは危険信号であり，その生活はかりそめでしかなく，現実の一部が男の内部のなにかの感情を突き，その感情の揺れを男が意識したときには，男は「夢」の外にはじきだされている。つまり，男は花の分類を手伝っていた娘とのあいだに，性の欲望と嫌悪の情という現実に直面しているのである。この娘の名前が Flora であるのは皮肉である。Flora との結びつきが「黄金色の ユキノシタ」(golden saxifrage) をともに愛でることからはじまって，傷つきやすく，もろい「クロッカスの花のような焔」(crocus-flame) の真の欲望に従順になることができなかったというのも皮肉である。

島を愛する男は娘との「性の自動作用」(the automatism of sex) の陥穽におちこむ。それは娘の「意志」の力のためであった。『恋する女たち』は女性を所有と支配との意志の化身にみたて，「偉大なる母」と呼んでいるように，男女関係を心理的な支配の力学で考えている。女性の所有意志と支配欲は同書のハーマイオニに結晶しているが，そのハーマイオニは，たとえば，「奉仕の気持ち」(subservience) をもっている。この「奉仕の気持ち」はつねに顕在化に刺戟されてたぎっていて，対象をもたなかったり，あるいは対象を見失ったりして不満になると，烈しい怒りとなって爆発する。そういう機構に女性の意志をみるようになっている。同様に，フローラも男に仕えたいという執拗な「隠れた欲望」を追い求める。執拗な追求とは意志の作用なのであって，それをもって愛だとするところに意志の特徴がある。この表現活動は誤解を誤解として意にかいすることもなく，女性を駆りつづける。そして，それが女性の力の およばないところで そうなっていることに，「性」とおなじ破壊的な「自動作用」がある。

娘の「意志」と「性の自動作用」に直面したとき，内なる真の欲望に忠実となって男と女があい交わる「稀有な境地」を希求しようとする男の願いもむなしい観念に終わる。

描写方法からみると，二人の関係は乾いた説明方式でなされていて，その結果，外に表

現を求めて娘の内部でうごめく「意志」を不満のまま抽象の領域に閉じこめ，欲望のみずみずしさの枯渇した「意志」がそのまま二人の非人間的な関係の硬直感を表わすようになっている。そのうえ，説明の視点が被害者の側だけに置かれていて，娘自身は自分の「意志」の破壊力を意識しないようになっているために，その破壊力の効果は醒めたレヴェルで高められる印象を与え，男の側の自己疎外感と混乱ぶりはますます烈しいようになっている。

欲望の機械人形の行為の末に娘の妊娠があって，結婚という遠ざけたはずの文明生活の約束ごとが男を待っていた。第二の島はもはや「避難所」であることをやめ，文明の俗塵にまみれた都会の「郊外」となった。島を愛する男は第二の島を去った。これもイヴのからんだ楽園追放の皮肉な現代的異本を下敷きにして考えてもよかろうか。

第三の島

第三の島で，島を愛する男はその生活を否定主義と逃避主義とを極限にまですすめていく。外部社会との接触の拒絶が高じて，男は樹木も灌木も植えようとしなかったが，それも木が自己主張をする人間にみえるという理由からであった。島は草木も育たない殺風景な岩山で，それはとりもなおさず男の生活の内部風景であった。これはまた，第二の島での結婚と女子誕生とによって「首にひき臼をかけられた」男の疲労感と嫌悪感の反映でもある。

男の人間嫌いはとどまることなく，病的になって，猫に話しかけた自分の声に仰天することもあった。羊の啼き声も耳障りになって，羊を島から追いだすことにした。そしてついに，音のない沈黙 (the great silence) の世界が男に最大の慰安を与えるようになった。

この沈黙と比較できるものに，『馬で去った女』の主人公が望んで迎えた犠牲の場における宗教的な沈黙や，メラーズがコニーと結ばれるためにでていくことになる『チャタレー夫人の恋人』の森の沈黙がある。これらは復活ないし再生，豊饒や生命力を約束したり象徴する沈黙である。第三の島の沈黙はそれとは異質で，男が否定に否定を積みあげていって生まれた沈黙である。だれにも，どこにも属すまいとする男の空白と無の沈黙であり，破られたあの「奇妙な静けさ」の延長である。だとすれば，「偉大な沈黙」と「最大の慰安」の関係がどんなものであるかもあきらかである。『馬で去った女』や『チャタレー夫人の恋人』の沈黙も安息や慰安でみなぎっているが，島を愛する男の慰安は荒涼と途絶の慰安である。これはすぐに男自身に嗜虐となってはね返ってくる。

この沈黙は激しい雨の音で破られ，島に数多くの鳥がやってくる。この海鳥の群れが男には「別な生命の世界」(another world of life) であったということは，男の属しているところが負の領域であるということになる。それでも，「かっての衝動」が戻ってきて，男は鳥の名前を知ろうとする。それは，「彼はその鳥の名前を知らなければならなかった。」からである。「生きものを知ることはそれを殺すことである」（『古典アメリカ文学研究』）というロレンスの考え方があって，それによれば，分析的に知ったり，固有名詞で区別したりすることによって対象と交感したとか，あるいは，対象を理解できたとするのは，神経の摩擦効果による錯覚なのであって，もっとも致命的誤解ということになる。知性の活動は実在に距離を与える抽象作業であり，実在から純粋な感覚機能を麻痺させ剝奪することである。

しかし，「別な生命の世界」に渡ろうとする欲望も男から消失する。そして男は，ふたた

び不毛な無関心と沈黙にもどる。だが，鳥の群れのなかに，一羽だけ美しく大きなカモメがいて，それが不思議な魅力で男の興味をひいた。その鳥は小屋の前を往復し，あたかも男にある「使命」(mission) をもっているようであった。ある批評家の指摘にもあるように，この一羽の鳥は，人間社会との連絡を完全に絶ち，海と静けさに閉ざされた状況のまっただなかで，突如として霧のなかから現われて，船の周囲を飛翔した『老水夫行』の「あほうどり」と結びつけて考えることができる。水夫たちの呼び声に応えて食べものや戯れのためにやってきた「あほうどり」は「吉兆」の鳥であったが，『島を愛した男』の海鳥は「不吉な」(portentous) 鳥であった。「あほうどり」(albatross) の alba はラテン語で「白」を意味しているが，このカモメの翼にも「あざやかな白い点が三つ」あった（下点筆者）。

この「あざやかな白い点が三つ」ある鳥もやがて姿をみせなくなり，島を愛する男の孤立主義は人間界や生物界の痕跡や臭いの抹殺にまですすんでいく。手紙が未開封のままで放置されるばかりか，男は表書きの自分の名前をみることすらもうとましく感じた。「あたかも彼の内部に溶解がはじまったようであった」。印刷や活字は「わいせつ」に思え，男はストーブのラベルも剝ぎ取り，小屋にあるあらゆる文字を消し取った。

男のこの態度は，第一の島における男の「エゴイズム」がそれみずからの機構によって本来の不毛と破壊の終局に向かうことと一致しているし，また，その「祝福の島」を「パーソナリティ」で満たそうとした姿勢と自虐の関係にあることを示している。そして，「エゴイズム」と「パーソナリティ」はその最後の挑戦対象に「自然力」(elements) を選ぶ。

雪の気配が漂い，死の冷気が満ち，小鳥たちは姿を消した。空は灰色となり，星はきらめかなかった。久しく太陽を忘れた男は，「まもなくなにもかも消えて，生きているものはなに一つなくなる」と思うと，「残酷な満足感」をおぼえるのであった。太陽や星を含めてあらゆるものの否定から生じるこの「残酷な満足感」は，孤立主義の極端な主張がそのドラマ化を頂点にまで押しすすめて到達する崩壊の感覚であり，その主張が男の自己否定にまでとどいた最終局面の恍惚感でもある。

朝，目覚めると，島を愛する男と島は銀世界に閉じこめられていた。「一点」に硬化し，凍結した男の内部が，今やその外側にも「等価物」を発見するのである。重い鉛色をした波が「屍体のような白い陸地」に噛みついた。二日めも舞いつづける雪は「葬式の列」のようであった。時が止まり，夜明けが近づかないように男に思えるこの段階では，男を他と結びつけるものは氷，雪，墓をのぞいてはなに一つなかった。雪のなかで，いわば男自身の不毛のなかで，男は半狂乱となってボートに辿りつこうとする。その行動は，「自然力」の脅威から脱出しようとする欲望とは無関係であった。たとえ雪に屈服して閉塞されるにしても，それが「自然力の機械的な力」でなされるのでなく，「彼自身の選択」によるものでなければならなかったからであった。男の「自然力」への抵抗の推進力は，その抑さえがたい不可抗力への拒絶の狂気であった。「パーソナリティ」と「エゴイズム」が最後の目標としての自然にたいして表現された虚無であった。

その虚無のなかで，男の知覚はもはや知覚であることをやめ，夜と昼の区別がさだかでなくなる。風のおさまった沈黙のなかで，男は一種の幻覚状態に陥る。三日めには，島は雪の丘の下に消えていた。自然と闘うことの無意味さをはじめて知らされた男は，自分の島とは判別不可能となった島の白い丘に「生霊」のように登って，「夏だ，葉のころだ」

と思う。この幻想には，「自然力」を征服しようとした狂者と愚者の素顔がのぞいている。

From far off came the mutter of the unsatisfied thunder, and he knew it was the signal of the snow rolling over the sea. He turned, and felt its breath on him.

作品最後の文章である。大きな宇宙のリズムを前にして，島を愛する男が自分の生を，「パーソナリティ」と「エゴイズム」ともども真白な世界に埋め，それを墓とすることが暗示されている。

〔III〕

第一および第二の島にくらべて，第三の島は地理的にはるかに縮小されているにもかかわらず，奇妙にも，そこにはもっとも拡大された空間の感覚が喚起されているようである。それは島を愛した男が崩壊へとすすんでいく過程のなかで，おのれから社会的属性を切り捨て，文明的なものを剝ぎ取っていくことによって達した意識の点的状態に原因があるようである。ここでわれわれは，男にたいして英雄視の態度をもつのではなく，いかに文明が人間を現実との接触から疎外し，実在感の喪失に役立っているかというロレンスの生涯の関心事を思い起こすべきであろう。あるいはまた，点に凝縮した男の意識が死の母胎となっているということにも，広がりの感覚の原因があるのであるし，その限界情況に，ロレンスが考えているある宿命観が溜まっていることも見落すべきではあるまい。

男は人間の基本的な衝動を限られているのはたしかであって，その限定された内部世界の描写が広がりの感覚を生んでいるというのは，第三部の描写や表現そのものがもっともロレンス的特性となっているからでもある。荒涼と破滅の点の世界を描いているその描写は，'It is doubtful...' ではじまる引用文にみられる，主人公の感情の秘密とそのからくりをあばいてみせる物語り手の攻撃的な視点から解放されていて，作品最後の引用文が示すように，『死んだ男』の描写を特徴づける，あのロレンス本来の「生命の焰」を狙ったスタイルとなっているからである。第一部と第二部には，読み方や解釈をスムーズにする論理性があるが，第三部には，その論理性を超えたいわゆる「情熱的経験」の緊張と密度がある。このことと，第三部の中心に死があることとは無関係ではないのであって，死と関係があるということで，島を愛する男の憑かれた心的緊張はより濃密になっている。

予測される男の雪中の死は，『恋する女たち』のジェラルドが自分のアイデンティティを追いつめていって逢着した死と，類型のうえではおなじである。ジェラルドがそのなかで死をはたす雪は，アルプスの雪という現実である一方，彼の本質を構成する要素の象徴としても取りあつかわれている。本来的に，島を愛する男はジェラルドの「産業界の大立者」が規定するその本質なるものをもっておらず，したがって，『島を愛した男』の雪は島に降る雪であって，「自然力」の一つのあらわれであるという単層の表意でしかない。ジェラルドにとっては，雪は最初から一体化が予定された対象であって，島を愛する男の雪は男の外側にあって，抵抗と拒否の対象である。かりに第一の島における過去の怨念や「地霊」が第三の島の「自然力」と置換できる性質のものであると考えるならば，その拒否の姿勢は生をまっとうし，おのれのアイデンティティを確認する衝動の放てきないし否定を意味しているわけで，その理論からいけば，男は「自然力」による復讐を予定されているのだともいえる。

復讐というどぎつい表現は，『馬で去った女』の主人公が迎える死への態度を考慮してのことである。『馬で去った女』の結末も死の予告となっているが，その死は彼女が住ん

でいた白人社会の宗教であるキリスト教否定の報いとして設定されるのではなく，アズテック族の古い神々の復活への希望の代替となっている。そこには，受けいれることに積極的で，死を賛美し歓喜する者の使命感があるが，島を愛する男には，それは見当らない。また，馬で去った女が死に発見した精神的，宗教的価値観を島を愛する男の生が欠いている事実は，男の人間嫌いからも成立するのであるが，その人間嫌いにしても，たとえば 'What repulsive god invented animals and evil-smelling men?' とスイフト調の人間呪咀が述べられても，ガリヴァーの透徹した人間性への洞察力から発しているふしはみえない。したがって，男はフゥイナム（Houyhnhnm）の理想にいき着くことを予想させはしない。男の生は，けっして豊かでない「パーソナリティ」で島を満たそうとする錯誤や，「エゴイズム」が被っている「善意」という虚飾などを土台としているがゆえに，男は目的の実現にみごとに失敗するばかりか，おのれを明確にする身分証明書を自分の手で書くこともできなかったのは当然といえる。

男の生は，人間の共同社会からの孤立は自己崩壊に匹敵するという作品のモラルと照応していて，逃避主義に隷属している。このことは他のロレンスの作品のパタンとも比較する必要があるのであって，特に人間嫌いとか逃避主義とかといったとき，『白孔雀』のアナブルと『チャタレー夫人の恋人』のメラーズの隠者の性格をおびているのではなく，彼らに束縛だと判断される経験があって，その束縛である文明的，社会的鎖をある時期に切ったのちにはじめられている。文明の遮断ということからは，男は彼らの生活の特徴を共有していても，逃避の先端に死があるという意味では，男はアナブルとだけ基本的につながっている。なぜなら，メラーズはコニーとともに社会に回帰する方向に歩みはじめているからである。そういった点で，『島を愛した男』は，ロレンスの思想の冒険の歴史から年代記的に眺めて，『白孔雀』に先祖返りをしている。この先祖返りという現象はあらためて他の作品をパースペクティヴに考究することを要求するのであって，そうなると，『島を愛した男』や『チャタレー夫人の恋人』とほぼ同期の創作でもあるし，ロレンスの総決算の中篇小説である『死んだ男』が重要な作品となる。

ロレンスは現代の文明，宗教，知性，機械主義などに登場人物の死を操作しなければならない否定的価値を看破した，ということはすでにいわれて古い。そこで当然，ロレンスは宗教的衝動や動機の欠如，否定主義，「地霊」の拒否などは島を愛した男の死に埋めこんだ。『恋する女たち』のバーキンが植物界を「結婚の場所」として，その豊饒と幸福の感覚ゆえに人間界にもどることをしばし逡巡したが，その基底にある思想も，ロレンスは島を愛した男のきわめて危険な逃避主義のなかに投げこんだ。そしてまた，ロレンス自身の理想郷「ラナニム」建設の失敗という個人的な苦汁の過去も島を愛した男の挫折のなかに消化させた。ロレンスは島を愛した男の幻想とその幻滅にあらゆるものを埋葬したのである。そこに先祖返りということが可能となっているのであり，そこで先祖返りの意味がでてくる。先祖返りは同時に，『死んだ男』への出発でもある。

だからこそ，〔I〕で書いたように，『島を愛した男』はロレンスにはめずらしい客観性をもった佳篇ではあっても，やはり「ぼく自身のための芸術」という彼のモットーは適用できるのであり，その客観性は，島を愛した男のイルージョンに足を引っぱられることなく，ローマ官憲の追求の手が身にさし迫ったことを知ったときも失うことのない，死んだ男の現象界へのたしかな認識へと伸びていくのである。それは同時に，ロレンス自身のたしかな認識の結果であるし，『島を愛した男』から『死んだ男』の認識に発展するプロ

セスには，ロレンスの二元論的発想が作用してもいるのである。

ロレンスの描く人物がタイプであるというのも真実であるが，そのタイプの登場にもかかわらず，思想の冒険はまちがいなくなされていて，その冒険のなかで，説話とか寓話とかいう形式の面でも最後の作品『死んだ男』につながるこの『島を愛した男』が占める位置は興味深い。